

研究ノート

ノッティングヒル・カーニバルの仮装パレードが語る「奴隷制」
——奴隷貿易禁止法成立二百周年の仮装芸術を事例として——

木村 葉子

キーワード

都市の祝祭、仮装芸術、アフロ・カリビアン、「奴隷制」

はじめに

ノッティングヒル・カーニバルは八月の最終週の連休にロンドンで行なわれる祝祭で、色鮮やかな仮装パレード、現代音楽が響きわたるサウンド・システム、カーニバル特有の無礼講が都市の喧騒と共鳴しあい、都心近くの閑静な高級住宅地ノッティングヒルは、一年に二日間、カリブの陽気な世界に変貌する。このカーニバルで中心的な役割を演じるのは、第二次世界大戦後にイギリスに渡ったカリブ海地域の旧イギリス植民地出身者とイギリスうまれの第二、第三、第四世代を含めた「アフロ・カリビアン」とよばれる人たちである。かれらは 15 世紀から 19 世紀にかけて行なわれた大西洋奴隷貿易で、アフリカからカリブ海地域へ売られた奴隷の子孫にあたる。大西洋奴隷貿易では、アフリカから大西洋を渡った奴隷の数は 1,200 万人を超え、人類史上最も凄惨を極めた中間航路の航海では、200 万人以上が命を落とした (HM Government 2007: 2)。

このような悲惨な奴隷制を終わらせるため、イギリス議会で奴隷貿易禁止法が成立したのが 1807 年 3 月 25 日で、2007 年は奴隷貿易禁止法成立二百周年を記念する年であった。2006 年 11 月に当時の首相トニー・ブレアが奴隷制に対して遺憾の意を表明したほか、2007 年には、様々な記念行事や特別企画が催された。政府をあげての奴隷制に対する取り組みには、大西洋奴隷貿易だけでなく、「現代の奴隷制」とされる売春などの人身売買、子供の労働や低賃金労働なども含まれ、本稿では、それらすべてを「奴隷制」と表記する。

ノッティングヒル・カーニバルは、奴隷解放から始まったトリニダード・カーニバルをルーツとするカリビアン・カーニバルの一つである。現代では、イギリス最大規模の祝祭となっているが、1976 年のノッティングヒル・カーニバルでは、社会に適應できないアフロ・カリビアンの若者と警備の警官隊が衝突して大暴動となり、大勢の警官が負傷した。国家の重要な政治的な問題となったこの時の報道から調査を開始したアブナー・コーエンは、ノッティングヒル・カーニバルを「都市の政治文化運動」として研究し (Cohen 1993)、かれの研究は、暴動や政治デモの事例として援用されている (毛利 2003)。

本稿は、イギリスの行政機関が関与し、観客層が多民族に拡大したノッティングヒル・カーニバルを「都市の祝祭」と位置づけ、メイン・イベントである仮装パレードに着目する。

本稿で用いる研究法は、和崎春日が都市祭礼の研究方法で提唱する「広さ」と多様性から都市社会を析出する方法と「深さ」と関係系から都市社会を析出する方法に依拠している(和崎 1996: 538-541)。「広さ」の方法では、祝祭に参加する集団の悉皆調査を行ない、「深さ」の方法では、特定の集団の重点調査として、継続的な参与観察と聞き取り調査を行なった。本稿は、2004、2005、2006、2007、2008年の8月から9月にかけてのロンドンにおけるフィールド調査と2010年8月の補足調査を基に、2007年の奴隷貿易禁止法成立二百周年を記念した仮装芸術のうち、ノッティングヒル・カーニバルの根幹となる「奴隷制」をテーマとし、ストーリー性をもつ作品に焦点をあてる。奴隷貿易禁止法成立二百周年の記念行事や特別企画を概観し、ノッティングヒル・カーニバルの仮装パレードの全体像を把握した上で、カーニバルで中心性をもつ三つの集団の事例を提示する。これらの集団はアフロ・カリビアン主導で、二十年以上の歴史をもち、カーニバルのコンテストでの入賞経験も豊富である。このような集団のメンバーが創造する仮装芸術を照射することによって、白人の貢献や業績から語られる主流社会の「奴隷制」に対する意識と黒人であるアフロ・カリビアン意識や心性の相違点を検討する。

1. イギリスにおける奴隷貿易禁止法成立二百周年の記念行事と特別企画

第一章では、イギリス全土で行なわれた奴隷貿易禁止法成立二百周年の記念行事や博物館・美術館での特別企画を検討する。それらのテーマ、主催機関の名称と開催期間を一覧表にしたものが表1である。文化・メディア・スポーツ省では、約170のプロジェクトに対して、国営宝くじ基金のヘリテージ・ロタリー・ファンドから1,400万ポンド(約33億6,000万円)の資金が提供された(木村 2008: 170)。イギリスの主流社会では、奴隷貿易禁止法成立の立役者とされるのが、下院議員のウィリアム・ウィルバーフォースである。

ウィルバーフォースは、1791年に奴隷貿易廃止法案を下院に提出し、法案は否決されるが、賛同者は増加した。翌年、かれの法案は圧倒的な支持を得て下院を通過するが、上院の激しい抵抗とフランス革命の激化で成立が阻止され、活動は一時停止状態に陥った。1804年にナポレオンによるフランス帝国が成立すると、再度法案を議会に提出し、1807年3月に奴隷貿易廃止法案が議会で可決された。その年の5月以降、奴隷船の出航と、翌年の3月には植民地での奴隷の陸揚げが禁止されたが、イギリス帝国内で奴隷制度が廃止されたのは、さらに二十数年を経た1833年であった(井野瀬 2007: 163-165)。

国会議事堂にあるウエストミンスター・ホールでは、「イギリスの奴隷貿易、奴隷制度廃止、イギリス議会、人々」と題して、イギリス議会の1600年から1807年の奴隷貿易廃止に至るまでの軌跡が克明に展示された。一連の記念行事や特別企画では、ウィルバーフォースやかれの仲間である福音主義集団クラップム派のグランヴィル・シャープやトマス・クラクソンといった奴隷制廃止に貢献した人々の活動に主に焦点があてられた。

このような記念行事や特別企画が開催された場所は、全国各地、ロンドン、ブリストル、リバプール、ハル、その他の地域と大きく六つに分けられる。ロンドン、ブリストル、リバプールは、三大奴隷貿易港である。イングランド北部にある人口約26万人の小都市ハルは、ウィルバーフォースの出身地である。キリスト教系団体が主催する「鎖の行進」では、

表1 奴隷貿易禁止法成立二百周年の記念行事および博物館・美術館での展覧会

No.	記念行事の主催団体・博物館の名称	開催期間	記念行事及び博物館・美術館の展示内容	開催地域
1	ロイヤル・ミント (王立铸貨局)	07/01	奴隷貿易禁止法成立記念硬貨の発行	全国
2	ハル市議会	07/01/17-07/03/01	ウィルバーフォース・記念レクチャー	ハル
3	スモール・アイランド・リード	07/01-07/03	作家アンドレア・リービーの読書会	全国
4	ウオーターフロント博物館	07/01/18-07/03/01	人種間機会均等のプロジェクト	スウォンジー
5	王立海軍博物館	07/02/03	自由の追跡・海軍と大西洋奴隷貿易	ボーツマス
6	大英博物館	07/02/22-08/04/06	大西洋奴隷貿易とアイデンティティ	ロンドン
7	ヴィクトリア・アルバート博物館	07/02/23-07/02/24	サトウキビ農園からティーカップへ	ロンドン
8	上記博物館分室・子供博物館	07/02/24-08/03/02	若くして逃亡した奴隷たち	ロンドン
9	ロイヤル・フィルハーモニア楽団	07/02/24	奴隷貿易禁止法記念コンサート	全国
10	奴隷制廃止論者の「鎖の行進」	07/03/01-07/03/25	ハルからロンドンまで鎖をつけて行進	全国
11	ヘアウッド・ハウス	07/03/16-08/11/02	1807年のヘアウッド	ヨークシャー
12	ウイスベク・フェンランド博物館	07/03-07/11	クラークソン・ブラザーズの展覧会	ケンブリッジ
13	ブレント・カウンシル	07/03/20	歴史の重荷	ロンドン
14	ロイヤル・メール	07/03/22	奴隷貿易廃止論者の記念切手6種発行	全国
15	ブリストル・ベイ企画	07/03/22	映画「アメージング・グレース」封切り	全国
16	リバプール大聖堂	07/03/25	世界教会的な悔悛の記念礼拝	リバプール
17	ブリティッシュ・ライブラリー	07/03/24-07/07/01	奴隷状態と奴隷解放までの苦闘	ロンドン
18	ブリストル大聖堂	07/03/25	奴隷制度回想と悔悛の記念礼拝	ブリストル
19	カーディフ市議会	07/03/25	奴隷貿易禁止法成立200周年記念	カーディフ
20	オール・セインツ教会	07/03/25	自由のための苦闘を想起する記念礼拝	ロンドン
21	カムデン・イベント	07/03/25-07/04/28	勇気から自由へ (大英博物館等での展示)	ロンドン
22	ウエストミンスター寺院	07/03/27	奴隷貿易禁止法成立200周年記念礼拝	ロンドン
23	ウィルバーフォース杯	07/03/28	ハルからロッテルダムまでの帆船レース	ハル
24	ヨーク・シアター・ロイヤル	07/03/30	映画「アフリカの雪」上演	ヨーク
25	アフリカン・ファミリーズ基金	07/04/05-07/10/30	スティッチーズ (パッチワーク作品展示)	全国
26	ヘリテージ・ロッテリー基金	07/04/10-07/12/31	ダーク・ヘリテージ (全国7か所)	全国
27	リバプール・ジョンムーズ大学	07/04-07/10	奴隷制度に関するロスコー・レクチャー	リバプール
28	英国帝国連邦博物館	07/04/23-09/04/23	鎖をこわす・奴隷制度廃止	ブリストル
29	テート・ギャラリー	07/04/30-07/10/21	1807年:ブレイク、奴隷制と急進派	ロンドン
30	人種間機会均等委員会	07/05	ウィルバーフォース議員の演説	全国
31	ナショナル・トラスト	07/05-07/10	砂糖と奴隷制:ペンリン城との結びつき	ウエールズ
32	マンチェスター博物館	07/05/05-08/05/05	暴露された歴史:奴隷制を回想する	マンチェスター
33	ウィルバーフォース研究所	07/05/16-07/05/19	奴隷制:未完の事業のカンファレンス	ハル
34	ウエストミンスター・ホール	07/05/23-07/09/23	英国の奴隷貿易:奴隷制廃止・議会・人々	ロンドン
35	ケンウッド・ハウス	07/05/24-07/09/02	マンズフィールド卿・奴隷制・正義	ロンドン
36	ウエールズ国立博物館	07/05-07/12	奴隷制に関する展示	カーディフ
37	リバプール・セフトン・パーク	07/06	アフリカ・オ・フェスティバル	リバプール
38	奴隷制廃止論者の「鎖の行進」	07/06/03-07/07/11	ロンドン・ブリストル・リバプール行進	全国
39	ナショナル・ギャラリー	07/07/20-07/11/04	スクラッチ・ザ・サーフェス	ロンドン
40	マージサイド海事博物館	07/08/23	奴隷解放の職務	リバプール
41	リバプール博物館	07/08/23	国際奴隷博物館開館	リバプール
42	国立海事博物館	07/08/23	現代奴隷制記念行事のディベート	ロンドン
43	ユネスコ	07/08/23	奴隷制度を回想する国際デー	全国
44	大ロンドン庁	07/08/23	メモリアルデー・ジョイント・シティ	ロンドン
45	ノッティングヒル・カーニバル	07/08/26-07/08/27	禁止法成立200周年記念仮装パレード	ロンドン
46	大ロンドン庁	07/09	フリーダム・コンサート (ハイドパーク)	ロンドン
47	バーミンガム博物館・美術館	07/09/13-08/01/13	エキアノ・プロジェクト	バーミンガム
48	ヤア・アサンテワ・アーツセンター	07/09/15-07/10/31	ウエストミンスターと大西洋奴隷貿易	ロンドン
49	イプスウィッチ博物館	07/09/26-08/06/30	奴隷貿易廃止:トマス・クラークソン	イプスウィッチ
50	ブリストル市議会	07/10	ブラック・ブリストル・アーカイブス	ブリストル
51	ブラック・ヒストリー・マンズ	07/10	アミスタッド:大西洋奴隷貿易からの自由	全国
52	ハンテリアン博物館	07/12/21	人種と主体性:1720年から1820年	グラスゴー
53	ウエアー博物館	08/02-08/03/07	相違:トマス・クラークソンの物語	北イングランド
54	ドックランド博物館	08/02/20-08/04/23	抵抗と達成:アフリカ人とカリブ人	ロンドン
55	チェルムスフォード博物館	08/06/28-08/08/25	最も長い旅路:奴隷制から奴隷制廃止	エセックス州

HM Government (2007), <http://www.culture.gov.uk>, <http://www.itzcaribbean.com> より筆者作成

表2 奴隷貿易禁止法成立二百周年記念仮装パレードに参加したマスバンドの名称、類型、テーマ

No.	マスバンドの名称 (アルファベット順)	型	2007年のマスバンドのテーマ
1	アラワク	IV	パウ・ワウ
2	バルバドス・カーニバル・コミティ	I	ついにみんな自由になった
3	バッカナリア	II	メキシコにむかって
4	バタラ (サンバスクールの太鼓部門)	V	アフロ・ブラジル文化のプロモーション
5	ダーク・インスピレーションズ	I	蝶の世界
6	ビーラーハー・スイート・コンビネーション	I	サトウキビ農園から水晶のグラスまで
7	バルキーツUK	I	仮面の陰に
8	キャラバッシュ・カーニバルクラブ	II	過去から未来へ:ハリケーンのあとの追悼
9	チャッツ・ブレース	II	コンセプト
10	親と子のカーニバル連合	II	翼をたずさえて
11	コキイー	II	過去からの仮装
12	ドラゴンズ・カーニバルクラブ	I	「オデッセイ」:永遠に自由を
13	エボニー・マス	III	カリブの海賊
14	フュージョン・コミュニティ・アーツ	I	大地:嵐のあとの太陽
15	フランボイヤン・カーニバルクラブ	I	スピリットの世界からのメッセンジャー
16	フラミンゴ・カーニバルアーツ	I	アジアのエッセンス
17	フォックス・カーニバルバンド	II	花園のフォックス:カーニバルの伝統
18	ジェネシス・カーニバル・カンパニー	I	ルネッサンス・トリロジー:フリーダムのファンタジー
19	ヘリテージ・ソーシャル・ダンス・アンド・アート	II	奴隷制度廃止:アメリカの南北戦争
20	アイシス・カーニバル	II	生命の循環:自然と美しさ
21	インスピレーションズ・アーツ	II	ついにみんな自由になった
22	インベダーズ・マスバンド	I	古代ギリシャの神話と伝説
23	ジャンプ・レー・カーニバルアーツ	I	多様性をもつ私たちすべての人々の繁栄
24	クウンバ・カーニバルバンド	II	「真実」の奴隷廃止論者
25	ラ・トリニティ	II	ジャブジャブ
26	マホガニー・カーニバルクラブ	I	フリーダム・ソング
27	マングローブ・マス	III	「失われた世界」パート1
28	マス・ドミニックUK	II	私は今でもたちあがる
29	マスカレード2000	I	アフリカ開花 (アフリカ・アンフォールズ)
30	ノスタルジア・カーニバルクラブ	III	奴隷解放
31	オキシジェン・マスバンド	II	カリブの季節・カリブの宝石
32	パディントン・アーツ・エリム	I	Nanse Nton Tan (クモの巣)
33	パライツ・サンバスクール	V	映画の素晴らしい世界
34	パディントン・スクール	I	ヤアが知っている物語:最終章:ヤアは動き続ける
35	ピーブルズ・オブ・パラダイス	II	子孫達:アウト・オブ・アフリカ
36	ピーブルズ・ワールド	II	フリーダム:鎖を断ち切る
37	パーベチュアル・オデッセイ	I	復活:音楽によるブラック・ヒストリー
38	フェニックス・カーニバル・コスチューム・バンド	II	ローマ人のバッカナル
39	ボイズUK	IV	ネクスト・レベル
40	ビュア・ライム	IV	チョコレート
41	シェードメーカー・カーニバルクラブ	I	グラン
42	ソカ・マシーブ・アソシエーツ	II	フリーダム2007
43	サウス・コネクションズ	I	旅路は今はいま
44	スターダスト	III	フリーダム
45	セント・クレメント・アンド・セント・ジェームズ	I	アウト・オブ・アフリカ
46	サンシャイン・インターナショナル・アーツ	II	自由のスピリッツのダンス
47	プライド	II	光とフリーダム
48	マッシュ・カーニバル・マスバンド	II	We Outta GT
49	トリニダード・トバゴ・カーニバルクラブ	II	フリーダム
50	トロピカル・アイルズ	I	マルチン・ルーサー・キングの夢をもつこと
51	TT マダーズ	IV	マダーズ・アース
52	ユニティ・カーニバルアーツ	II	解放:西洋のヘレネー
53	ヤア・アサンテワ・カーニバル・グループ	I	ヤアが知っている物語:最終章:ヤアは動き続ける

聞き取り調査、木村 (2007)、Notting Hill Carnival Grooves (2007) pp. 49-51 より筆者作成

2007年3月1日にハルを出発し、奴隷の中継地であったロンドンに3月25日に到着するまで、約400キロの道程を鎖につながれて歩き続けたほか、ハルからオランダ南部にあるロッテルダムまで、ウィルバーフォース杯と冠した記念の帆船レースなども開催された。

2. 奴隷貿易禁止法成立二百周年のノッティングヒル・カーニバル

2007年のノッティングヒル・カーニバルの仮装パレードも、奴隷貿易禁止法成立二百周年の記念行事の一つとして数えられている。カーニバルは、8月最終週のバンクホリデーの連休に開催され、日曜日が子供のカーニバル、月曜日が大人中心のメインのカーニバルである。カーニバルの華とされる仮装パレードは、この二日間の午後から夜にかけて、全長4.9キロの片道一車線の生活道路で行なわれ、それぞれのチームが、その年の最高の賞である「バンド・オブ・ザ・イヤー」のタイトルをめざして演技を競いあう。

仮装パレードを構成しているチームが「マスバンド」で、マスは仮装、バンドは集団を意味する。ノッティングヒル・カーニバルのマスバンドの形態は、六つの型に大別される。

- I. 大型特別衣装を制作する仮装衣装制作マスバンド
- II. 大型特別衣装を制作しない仮装衣装制作マスバンド
- III. 打楽器スティールパンを演奏するスティールバンドを中心としたマスバンド
- IV. I, II, IIIと異なる衣装を制作しないマスバンド
- V. イギリスのサンバスクール
- VI. 特定のエスニック・グループの民族舞踊集団など

仮装衣装は、パレードに参加する人たちが身につける一般用の仮装衣装とテーマの主旨を反映した「クイーン」や「キング」などとよばれる大型特別衣装に分類される。マスバンドで中心となるのは、大型特別衣装を制作するI型のマスバンドである。その大半はアフロ・カリビアン主導型で、カーニバル一週間前に開催される室内のコンテストでも鎬をけずりあう。2007年は、大半のマスバンドが奴隷貿易禁止法成立二百周年を意識したテーマを選定し、アフロ・カリビアンのイデオロギーを表出する格好の機会となった。表2は、この年のマスバンドのテーマとマスバンドの形態を一覧表にしたものである。

2007年のマスバンドのテーマには、「奴隷解放」や「フリーダム」といった「奴隷制」に関連する言葉が使われているものが例年より多くみられた。フリーダムという言葉を使ったテーマの一つが、I型のマスバンド、マホガニー・カーニバルアーツの「フリーダム・ソング」である。このテーマの背景にあるのは、黒人女性ジャズ歌手のビリー・ホリデーの「奇妙な果実」というアメリカの人種差別を告発する歌であった。遠くからみると果物に見える「奇妙な果実」とは、木に吊るされた黒人の死体である。アメリカの南部では、黒人が暴行を受け、首をしめられたうえに、木に吊るして火をつけて焼き殺されるという蛮行が行なわれていた。1930年にビリー・ホリデーのために作られたこの曲は、黒人への暴力反対運動のきっかけとなり、公民権運動につながっていった。仮装芸術では黒人差別の悲しい現実から解放され、自由を獲得していく姿が美しく表現されている。

フュージョン・コミュニティ・アーツの2007年のテーマは「大地:嵐のあとの太陽」で、

「嵐のあとの太陽」という神話を抽象的に解釈している。豊かな土地を破壊し、多くの人々を殺戮した「奴隷制」を嵐で表現し、苦難のあとに勝ち得た希望や生命の息吹を太陽で表現している。暗い土の中で埋もれていた種が、太陽の光をあびて成長していくように、過去を記憶するとともに、明るい将来に向かって前進する姿勢を仮装芸術で表現した。

I型やII型のマスバンドでは、テーマにあわせて仮装芸術が創造され、道路を舞台とするストリート・パフォーマンスが構成される。有末賢は、都市の祝祭には「ストーリー性の確保」すなわち「物語の創出」という仕掛けがあることを指摘しているが、都市祝祭におけるストーリーの重要性は、それによって、祝祭に参加する人々や観客にリアリティをもった「意義づけ」がなされるからである(有末 2000)。

3. 奴隷貿易禁止法成立二百周年におけるアフロ・カリビアン主導の仮装芸術の事例

3-1. パディントン・アーツ・エリムーの「Nanse Nton Tan (クモの巣)」(表2 No.32)

仮装パレードの歴史の部門で入賞したパディントン・アーツ・エリムーのテーマは、「Nanse Nton Tan」であり、ガーナのアシャンティの言葉で、クモの巣という意味である。パディントン・アーツ・エリムーは、1979年に設立され、ウエストミンスター区のパディントン・アーツ・センターを活動拠点としている。カーニバル当日だけの参加者も含めると約150人のメンバーの多くは、アフロ・カリビアンである。2006年から2009年まで、トリニダード在住のプロのコスチューム・デザイナー、マーロン・グリフィスがノッティングヒル・カーニバルの前の数ヶ月間ロンドンに滞在し、仮装芸術の制作を行っていた。2007年はクモの伝説をもとに仮装芸術が構成されたが、その背景にトリニダードのカーニバルで優勝する仮装のモチーフに、アナンシ・ストーリーというクモの化身を主人公とする物語がある。アナンシは、ガーナのアシャンティにとって偉大なクモであり、知恵の象徴であり、奴隷に力を与える動物であった(志麻 1983: 59)。グリフィスは、奴隷に力を与えるクモの話にかれ自身のイマジネーションを加えて、「奴隷制」を意識した仮装芸術を創造した。

グリフィスは、個々の仮装芸術に対して次のように意味づけしている。仮装芸術の中で最も大切なクイーンの大形特別衣装は、「すべての母」であり、生命誕生の源である母と母の胎内にある羊水や胎児の進化が表わされている。キングの衣装は「すべての中の光」で、世界や人類を創造した光は、頭脳や精神を司り、純粋で賢明、平和を愛し世界の正義を全うする闘士でもある。一般用の仮装衣装は四種類で、神や守護霊が意識されている。「私の目を見て」は、女性の守護霊で、愛と多産が強調され、承認と自信を意味する孔雀で表現されている。「運命の剣」は、鉄と戦争、労働の神で、技術全般を支配するこの神は、20世紀にトリニダードで生まれた楽器スティールパンに霊の存在が最も影響力をもっている。「アヤの幻想」は、若者の霊魂と成長を司る守護霊である。ガーナのアシャンティの人々が創造した象徴的な意味をもつデザイン、アディンクラ・シンボルのアヤは、シダで表象され、忍耐力を意味し、逆境や困難に耐え抜くことができるとされている。「天使の髪」は、繁栄と裕福な生活を司る守護霊であり、肉体的及び霊的な力を意味している。夢の中に霊として現われ、夢見るものには髪の毛をたくさん与えてくれるものである。

これらに通底するのは、グリフィスのこうした仮装芸術全体に対するコンセプトである。

「大西洋の風と海は、アフリカから西洋に祖先を運んできた。体は鎖に繋がれていたが、魂はしっかりと母なるアフリカに結びついていて。これから仮装芸術で霊的、肉体的、形而下の次元での旅にしよう。捕われ人として育んできた霊性、踊り、歌がカリブ海地域で根づき、言葉や踊り、信仰にそれらが継承されている。今日アフリカン・ディアスポラは、源流からそれぞれ光を放っているのである。我々が生きているのは、精霊に導かれ、守られているからである。精霊の保護と導きにより、古代文明の遺産を受け継ぐことができる。歴史を通して我々がたどった軌跡は、つくられた伝説に進化していく。」

グリフィスの意味づけには抽象的な概念が多くみられ、霊の守りと導きが強調されるが、その理由としてかれの祖母のシャンゴ信仰が、彼の芸術創造の原動力であると語っている。シャンゴは、ナイジェリアのヨルバの神であるオリシャの神々の一つであり、トリニダード出身者には、祖母のシャンゴ信仰から霊力をもらうという人々がみうけられる。

3-2. サウス・コネクションズの「旅路は今始まる」(表 2 No.43)

仮装パレードの歴史の部門で第 1 位を獲得したのが、サウス・コネクションズである。このマスバンドは、1986 年にトリニダード出身のアヴィオン・ムックラムと看護師仲間によって設立された。ノッティングヒルのカーニバル・ルートや大半のマスバンドがテムズ川の北岸にあるが、このマスバンドの活動拠点は、テムズ川南岸にあるランベス区のオーヴァルに位置している。約 200 人のメンバーの多くがアフロ・カリビアンである。2005 年からトリニダード出身で新進気鋭のコスチューム・デザイナー、ショーン・キャリントンをむかえた。七種類の一般用仮装衣装に対するかれの意味づけは以下のとおりである。

「捕われの状態」—1540 年から 1850 年に何百万人ものアフリカ人がアメリカに渡った。捕えられ、鎖に繋がれ悲惨な状態で海を渡り、生き残った奴隷は半分ほどであった。

「サトウキビ」—西欧人の砂糖の需要によって、大西洋奴隷貿易の中でもカリブ海地域のサトウキビ農園は重要で、莫大な利益のためにアフリカ人奴隷の労働力を必要としていた。

「綿花を摘む人」—アメリカの綿花栽培では、奴隷労働力が多く投入され規模が拡大した。1803 年にはジョージアやサウス・カロライナで 2 万人以上の奴隷が綿花を摘んでいた。

「豪華な舞踏会」—奴隷を搾取した富により、奴隷主や奴隷商人は豪華な生活を享受した。社交界では晩餐会や祝宴が頻繁に開かれ、絢爛豪華な衣装を仮装衣装で再現している。

「反乱」—奴隷の過酷な現実に対する苦悩を表わし、抑圧の源を断ち切るために奴隷たちは闘い始め、徐々に願っていた社会的な承認を獲得していくようになっていった。

「南部の優雅さ」—抑圧から自由を獲得し始めた元奴隷の黒人たちはニューオーリンズなどの都会に移住し、解放され、独自の文化にフランス様式を加えた生活様式を確立した。

「祝典」—束縛から解放され、奴隷として抑圧されることがない喜びを祝う祝賀の時がきたことを奇抜な色で表わし、奴隷が勝ち取った自由の真の意味を象徴的に表現している。

キャリントンは、アメリカ南部やカリブ海地域の「奴隷制」をドラマチックに仮装芸術に表現した。砂糖や綿花の栽培に多くのアフリカ人の奴隷労働力が投入され、それにより奴隷主たちは莫大な富を得て、贅沢な暮らしを享受したが、その陰で、奴隷には過酷な現実が待ち受けていた。キャリントンは、その過酷な現実よりも、闘うことによって自由を獲得し、抑圧や苦悩から解放された喜びや奴隷が勝ち取った真の自由を強調している。

3-3. ヤア・アサンテワ・カーニバル・グループの「ヤアが知っている物語」(表2 No.53)

1979年に設立され、「バンド・オブ・ザ・イヤー」の称号を獲得した経験もあるヤア・アサンテワ・カーニバル・グループは、最も代表的なマスバンドの一つで、マスバンドの活動拠点であるウエストミンスター区にあるヤア・アサンテワ・アーツセンターは、イギリス全体の黒人芸術の中心地となってきた。ヤア・アサンテワは、ガーナのアシャンティ帝国陥落を図ったイギリス軍に対して、戦士としてライフルをもって戦いに挑んだ皇太后の名前で、アフリカン・ナショナリズムの象徴とされている。200人規模のヤア・アサンテワ・カーニバル・グループのメンバーのエスニシティは多様であるが、その多くがアフロ・カリビアンである。トリニダード出身のリーダー、シャバカ・トムソンは、ノッティングヒル・カーニバルの全体的中枢組織「カーニバル・ビレッジ」の代表でもあり、かれの妻で、ジャマイカ出身のアンジェラは、2002年の創設以来、ノッティングヒル・マスバンド協会の会長をつとめている。このマスバンドでは、2005年から2007年の奴隷貿易禁止法成立二百周年まで3年間のプロジェクト「ヤアが知っている物語」を行なった。このプロジェクトでは、イギリスにおける黒人の歴史を1400年から1799年、1800年から1948年、1948年から現代までの時代に区分し、一つの物語として構成した。

3-3-1. 「ヤアが知っている物語 第1章 最初の時代」(2005年)

2005年の「最初の時代」では、15世紀から18世紀までのイギリスにおける黒人の出現が表象され、歴史的人物に焦点があてられた。クイーンとよばれる主要な大型特別衣装では、ジョージ3世の王妃であり、ビクトリア女王の祖母にあたるクイーン・シャーロットが選ばれた。アフリカ系の人々の間では、クイーン・シャーロットには白人と黒人の混血の特徴があるとし、女王の血統には黒人の血をひく人がいるとされている。彼女の系図をたどると、15世紀のポルトガルの貴婦人、マルガレータ・デ・カストロに行きつくことが明らかになった。カストロは、13世紀のポルトガルの王、アルフォンス3世とアフリカ北西部に住むムーア人の愛人の血をひいていた。カストロの血は、北ヨーロッパの王家に受け継がれていくが、クイーン・シャーロットに最も色濃く表れたと言われる。

キングの大型特別衣装では、奴隷解放に貢献した四人のアフリカ人が大きな人形で表わされ、鎖で奴隷の役に繋がれている。この四人は、オラウダー・エキアノ、イグナティウス・サンチョ、ロバート・ウェッダーバーン、メアリー・プリンスである。エキアノは、ベニン王国の裕福な家に生まれ、11歳のときに誘拐されて奴隷となった。イギリスの海軍将校に買い取られ、海軍の火薬運搬係として働いたこともあるが、再び奴隷としてカリブ海地域の残虐行為を目のあたりにしたあとイギリスで奴隷解放運動に使命をもっていった。奴隷船上で生まれたサンチョは、イギリスのモンタギュー家の使用人となったあと、ウエストミンスターに開いた食料品店が成功し、イギリスで最初に投票できた黒人となった。奴隷主と奴隷の子供のウェッダーバーンは、ジャマイカで生まれた。イギリスに渡って、船員、洋服仕立業を経験したのち、急進派改革者のリーダーとなり、ユニテリアン教会の牧師となった。奴隷制反対論者で、言論の自由のキャンペーンをつづけた。プリンスは、奴隷の娘としてバミューダ島で生まれ、自らも12歳で奴隷となった。ロンドンに連行されるとモラヴィア教会の伝道所に逃げこみ、奴隷制反対協会で働いた。

この四人は、文章をとおして奴隷制反対を訴えた。エキアノは1789年に回想録『アフ

リカ人、オラウダー・エキアノ、またの名をグスタヴ・ヴァッサの興味深い物語』を著わし、イギリス国内はもとより、アメリカやヨーロッパでも大反響をよんだ。サンチョの書簡は、彼の死後『アフリカ人、故イグナティウス・サンチョの書簡集』として1780年に発刊され、ウェッダーバーンは、1824年に『奴隷制の恐怖』を出版した。プリンスが1831年に書いた『西インド諸島の奴隷、メアリー・プリンスの歴史』は、イギリスで最初の黒人女性による著書となった。この著書には奴隷としての過酷な生活が描かれ、初期の黒人文学で大きな役割を果たした。四人に共通するのは、自らの奴隷体験などを書物に著わしたことで、「奴隷制」の悲惨さを世論に訴えて奴隷貿易禁止法案成立に貢献した点である（Kimura 2007）。

2005年の一般用仮装衣装では、大人用に「夜のムーア人」、「サンズ・オブ・アフリカ」、「セント・ジャイルズの黒い鳥」、「ハーレクイン」の四種類と子供用に「貴族のペット」が制作された。「セント・ジャイルズの黒い鳥」では、アメリカの独立戦争でイギリス側のロイヤリストとして戦った奴隷が解放された後、ロンドンの大貧民街セント・ジャイルズに黒人の乞食となってあふれていたことを表わしている。「貴族のペット」は、18世紀に貴族のペットや玩具として取り扱われたが、成長したのちは奴隷にもどされ、多くが悲しい歴史をたどる黒人の子供奴隷の物語である。

3-3-2. 「ヤアが知っている物語 第2章 ヤアはどのようにやってきたか」(2006年)

2006年の「ヤアはどのようにやってきたか」は、奴隷貿易が終息にむかう19世紀初頭から1948年までの歴史を表わしている。1948年の移民船ウインドラッシュ号の来航は、イギリスの戦後移民の開始を告げるもので、多民族国家へと変貌する象徴的な「事件」として取りあげられている。「世界の工場」あるいは「日の沈むことのない帝国」として繁栄をきわめた19世紀のイギリスにおいて、アフリカ人奴隷の労働力がいかに重要な役割を果たしたかについて、仮装衣装でアイロニカルに表現している。クイーンの衣装では、赤と金と白のコントラストの強い色調から、現実の世界の対極にある華やかなイマジネーションの世界を描き出している。キングの衣装は3メートル以上ある仮装衣装で、アフリカ人としての強さ、男性らしさがライオンで象徴されている。そのほかの大型特別衣装では、産業革命時代の機械や蒸気機関車が仮装芸術として創造された。こうした仮装芸術の背景には、トリニダードの初代首相で、歴史学者のエリック・ウィリアムズが主張するように、黒人の労働による奴隷貿易で得た資金によって産業革命が成立したという思想がある（ウィリアムズ 2004）。

2006年の一般用の仮装衣装では、大人用に「奴隷制廃止の時代」、「果物農園の労働力」、「植民地の戦士たち」、「万華鏡」の四種類が制作され、子供用に「サトウキビ畑」が制作された。これらの仮装衣装でもイギリス人の豊かな生活のために、アフリカ人奴隷がいかに過酷な労働に耐えてきたかを豪華な仮装衣装で皮肉をこめて表現している。「奴隷制廃止の時代」では、暗黒な奴隷制から解放されることを白の布地と大きな鎖で表現し、1789年に設立された奴隷貿易廃止協会の証印が象徴されている。その証印には、「一人のアフリカ人が...鎖に繋がれ地に片膝をつき、両手を天に差しのべ、請い願っている。証印の回りには...『私は人間ではないのですか、兄弟ではないのですか』という標語があった」とされている。イギリス屈指の陶磁器メーカーを創設し、トマス・クラークソンやグランヴ

イル・シャープらとともに奴隷貿易廃止協会を設立したジョサイア・ウェッジウッドは、この図柄を描いた陶器を何千枚もつくった(マニックス 1976: 218)。「果物農園の労働力」は、ピンクを基調とした鮮やかな衣装で、トロピカル・フルーツの生産の陰に、過酷な奴隷の労働が存在していたことをアイロニカルに表現している。「植民地の戦士たち」では、植民地出身のアフリカ系の兵士が戦闘の最前線に立って母国のために戦い、多くが死に直面したという暗い現実を豪華な赤と金の仮装衣装で表わしている。

「ヤアが知っている物語」の第2章と第3章が区分されているのが1948年である。この年は、移民船エンパイア・ウインドラッシュ号がロンドン東方のテムズ川に臨むティルベリーに入港した年である。アフロ・カリビアン移民の歴史のはじまりとして象徴されるウインドラッシュ号は、二年にわたって仮装芸術として制作された。この船上で世界的に有名になった諷刺歌謡カリプソを作曲した偉大なカリプソニアン、ロード・キッチナーは、大きなからくり人形の仮装芸術となってロンドンの街を練り歩いた。

3-3-3. 「ヤアが知っている物語 第3章 ヤアは動きつづける」(2007年)

2007年仮装芸術は、1948年から現代までの歴史を問うものである。大型仮装衣装では、「ブラックパワー」の象徴として、ロンドンの金融街シティを制覇するブラックパンサー(黒豹)が用いられた。ブラックパンサーは、アメリカ合衆国で展開した黒人民族主義運動の急進的な政治組織名でもある。「パン・アフリカニズム(汎アフリカ主義運動)」では、アフリカから世界にむけて発信される運動を、アフリカン・ドラムに起源をもち、世界中で愛される楽器、スティールパン(パン)の形で表象している。「アフリカの救済」では、アフリカ人特有の髪型、ドレッドロックをカラフルに表現し、エチオピアのハイレ・セラシエ皇帝を神とし、アフリカ回帰を訴えるラスタファリ信仰を表している。「ブラッド・リンクス」では、ほとんどすべての人がもつDNAのなかに、黒人の血が入っていると想定され、白人と黒人は血によってつながっていることが強調されている。

2007年の一般用仮装衣装では、「ステレオタイプ」、「パン・アフリカニズム」、「アート・アンド・カルチャー」、「インテグレーション(統合)」の四種類が制作され、アフリカ性をアピールするとともに、そこからすべての人種が統合することがめざされた。「ステレオタイプ」では、槍をもった未開なアフリカ人を表わし、主流社会の黒人に対するイメージを表現している。今でも、アフリカ系の人々に対して、差別や偏見が存在している。しかし、アフリカの文化を尊重し、そこに価値をみいだすことを仮装芸術は問いかけている。オリンピックなどをみても、現代のイギリスでは、アフリカ系の人々の活躍ぬきには語るができない。「アート&カルチャー」は、アフリカ系の人々がイギリスのスポーツ界や芸術の世界で活躍することを表わしている。現代においては、差別や偏見をのりこえて、白人と黒人、すべての人種が一つの社会で統合することがめざされる。「インテグレーション(統合)」は、白と黒、黄色を用いた仮装衣装で表現され、人種差別のない理想的な未来に向かって「動きつづける」ことを提唱している。

ヤア・アサンテワ・カーニバル・グループの三年間にわたるプロジェクトでは、これまで白人の視座で、白人の貢献が語られることが当然視されてきたイギリス史を黒人の視座からとらえなおすことを試み、イギリス社会における黒人の出現や貢献を仮装芸術に表現した。イギリスでは、第二次世界大戦後に初めて黒人が来たように思われているが、15世

紀からイギリスの歴史において、黒人は多大な貢献をし、それによってイギリスは富を築き、繁栄を享受してきたことを仮装芸術で表現することで、社会に問いかけようとした。

ヤア・アサンテワ・カーニバル・グループには、専属のコスチューム・デザイナーはいない。ヤア・コレクティブといわれる中心的なメンバーが会合やスタディツアーを重ね、芸術を創りだしてきた。3年間にわたる仮装芸術のもとになるデザイン画をおこしたのは、トリニダード在住のジェラルド・ビエイラである。2008年はロンドンに滞在し、ヤア・アサンテワ・カーニバル・グループで活動を共にしたビエイラは、トリニダードで5,000人規模のマスバンドのコスチューム・デザイナーをしていたこともあるプロのカーニバル・アーティストであり、イラストレーターでもある。かれは、トリニダードではカーニバルが生活・文化の中心であり、人種や宗教に関係なくすべての人たちが参加しているが、ロンドンではごく一部の人たちの間のカーニバルであることを、指摘している。トリニダードでは、大型特別仮装衣装の競争は年々激化しているが、一般用の仮装衣装はほとんどがビキニ型のものになり、意味をこめた仮装衣装はほとんど作られなくなっていると言う。ヤア・アサンテワ・カーニバル・グループでは、一般用の仮装衣装にも深い意味づけを行ない、独自の文化を主張していることを高く評価している。

おわりに

本稿は、奴隷貿易禁止法成立二百周年の記念行事や特別企画を概観し、その一つであるノッティングヒル・カーニバルの仮装パレードに焦点をあて、このカーニバルの根幹にある「奴隷制」の問題を仮装芸術のコンセプトから検討した。2007年に行なわれた記念行事や特別企画では、主にイギリス議会で奴隷貿易禁止法が成立する過程で貢献したウィリアム・ウィルバーフォース議員やトマス・クラークソンなど、クラップム派の人々に焦点があてられた。ウィルバーフォースの出身地ハルでは、奴隷としての苦しみを追体験するために、ロンドンまで鎖をつけて歩く「鎖の行進」や記念の帆船レースが開催された。

ノッティングヒル・カーニバルの仮装パレードは、一連の記念行事や特別企画とは異なった視点から「奴隷制」の問題をとらえている。ウィルバーフォースやクラップム派の人たちを対象にしたテーマや奴隷の苦しみを追体験する意図をもつテーマはみられなかったが、2007年は特別な年であった。テーマに奴隷解放や自由がふくまれているものが全体の約四分の一を占め、テーマからは明らかにされないが、「奴隷制」をあらわしているものが数多くあった。本稿では、その一部を提示してきた。

ノッティングヒル・カーニバルの仮装芸術には、神話、伝説、宗教、物語、史実などに、作者の解釈やイマジネーションが加えられ、独自の世界が構成されている。マホガニー・カーニバルアーツは、ビリー・ホリデーの「奇妙な果実」という歌からアメリカ南部の黒人に対する蛮行をテーマとした。パディントン・アーツ・エリムーでは、ガーナのアシャンティのクモにまつわる神話をモチーフとして独特な仮装芸術が創造された。サウス・コネクションズでは、アメリカやカリブ海地域の「奴隷制」に焦点があてられ、過酷な現実から解放され、自由を獲得する喜びや真の自由をえることが強調されている。ヤア・アサンテワ・カーニバル・グループでは、1400年から現代までを三つの時代に区分し、白人の視座で、白人の貢献が語られてきたイギリス史を黒人の視座からとらえなおすことを試み、

イギリス社会における黒人の出現や貢献をカーニバルの仮装芸術に表現してきた。ノッティングヒル・カーニバルの仮装芸術では、「奴隷制」の苦しみや非人道性を直接的に批判したり、それを再現するのではなく、暗黒な現実を多彩で豪華な仮装芸術でアイロニカルに表現している。モチーフは、それぞれのマスバンドやコスチューム・デザイナーごとに様々であるが、「奴隷制」を表現する仮装芸術にはストーリー性があり、パレードに参加する人々や仮装芸術を見る人たちにリアリティをもった「意義づけ」がなされている。仮装芸術のコンセプトは大仰に掲示されたり、語られたりすることはない。しかし、確実に次世代に継承される意味をもち、主流社会とは異なる意識や心性が形成される。ノッティングヒル・カーニバルは、象徴となるものを多く内包するが、「奴隷制」もその一つである。

「奴隷制」の問題に対して、支配者である白人と被支配者である黒人の視点は異なり、ノッティングヒル・カーニバルの仮装パレードでは、支配者の視点をもつ仮装芸術はみられなかった。こうした芸術では、白人の人道援助と尽力によって奴隷貿易禁止法が成立し、「奴隷制」が終結したのではなく、奴隷自らの力で自由を獲得するために立ち上がったことやイギリスの歴史における黒人の貢献、アフリカの文化に対する礼讃が強調されている。大西洋奴隷貿易によって、莫大な数のアフリカ人とアフリカの文化が失われた。しかし、豊かなアフリカの文化は、歌、踊り、美術などの芸術を通して、現代まで継承されている。ノッティングヒル・カーニバルは、このようなアフリカの文化を確認する機会でもある。そのため、アフロ・カリビアンなどのアフリカ系の人々が共有する概念と主流社会の人々のもつ概念は必然的に違ったものになっている。ここにアフロ・カリビアンの自文化主張がみられる。自分のルーツを共有できる人々と共有された象徴でつながりあうことにより、多くの人々の共感を呼び覚ましている。ロンドンの街をカリブの世界に似せた仮装パレードでは、一つ一つのマスバンドがそれぞれ象徴となるものをつくりだし、それらを共有できる人々があつまって、都市の大きなエネルギーをうみだしているのである。

参考文献

Cohen, A.

1993 *Masquerade Politics: Explorations in the Structure of Urban Cultural Movements*, Berkeley / Los Angeles: University of California Press.

HM Government

2007 *Bicentenary of the Abolition of the Slave Trade Act 1807-2007*, Wetherby: Department for communities and Local Government Publications.

Kimura, Y.

2007 “How ‘Africa’ is Symbolized in Masquerade Arts: Case Studies in the Notting Hill Carnival in London”, *Annals of Comparative Social and Human Sciences*, 5: 219-228. (『アフリカ』はどのように仮装芸術に表象されるか——ロンドンのノッティングヒル・カーニバルの事例より——『比較人文学研究年報』5: 219-228.)

Notting Hill Carnival Grooves (2007), London: Joseph Charles

<http://www.culture.gov.uk> (2008年1月22日取得)

<http://www.itzcaribbean.com> (2008年1月26日取得)

有末 賢

2000 「現代の都市空間におけるメディアと祝祭」、日本生活学会編『生活学第二十四冊祝祭の一〇〇年』、pp. 261-282、ドメス出版。

井野瀬 久美恵

2007 『大英帝国という経験』、講談社。

ウィリアムズ, E.

2004 『資本主義と奴隷制——経済史から見た黒人奴隷制の発生と崩壊——』、山本伸訳、明石書店。

木村 葉子

2007 「ロンドンのノッティンゲルヒル・カーニバル——都市の祝祭集団『マスバンド』の分析を中心として——」『生活学論叢』12: 38-51.

2008 「グレートブリテン・北アイルランド連合王国（英国）」『諸外国の文化政策・行政比較』、pp. 149-174、シー・ディー・アイ。

志麻 麗子

1983 『カリブ・闇と光の宴』、筑摩書房。

マニックス, D. P.

1976 『黒い積み荷』、土田とも訳、平凡社。

毛利 嘉孝

2003 『文化=政治 Culture=Politics: New Cultural-Political Movements in the Age of Globalization』、月曜社。

和崎 春日

1996 『大文字の都市人類学的研究——左大文字を中心として——』、刀水書房。